



## 猿橋勝子名誉会員のご逝去を悼む

廣瀬 勝己

日本地球化学会猿橋勝子名誉会員は、2007年9月29日間質性肺炎でご逝去されました（享年87歳）。ご逝去に際して、謹んで哀悼の意を表します。

猿橋先生の略歴を簡単にご紹介します。猿橋先生は1943年9月帝国女子理学専門学校（現東邦大学理学部）をご卒業され、直ちに当時の中央気象台に勤務されました。1946年2月気象研究所の発足とともに気象化学研究室の三宅泰雄先生のもとで、地球化学・大気化学・海洋化学の研究を始められました。そして、1957年4月「天然水中の炭酸物質の行動について」というテーマで東京大学より理学博士の学位を受けられました。また、1962年6月から7ヶ月に亘りアメリカ合衆国のスクリップス海洋研究所で研究に従事されました。その後、1970年には、日本学術会議の水地球化学生物地球化学国際会議組織委員会委員に就任され、日本の学術の発展に貢献されました。1974年4月には気象研究所地球化学研究部第2研究室長に昇任、さらに、1979年4月には、女性として初めて同研究部長に就任されました。同年には、原子力連絡会議委員や海洋開発審議会専門委員等の国の専門委員を勤められました。1980年4月に定年で気象研究所を退職されています。

気象研究所退職後は、東邦大学客員教授、女性として初めての日本学術会議会員等を歴任するとともに、地球化学研究協会の専務理事や、「女性科学者に明るい未来をの会」の専務理事として、日本の地球化学の発展や、女性科学者の地位向上のため努力を払われてきました。特に、三宅泰雄先生が創立された地球化学研究協会は、先生亡き後も先生の遺志を受け継ぎ、地球化学の普及と地球化学者の顕彰のため、中心的な役割を果たされました。さらに、日本地球化学会についても、庶務幹事や評議員を勤められるなど、地球化学会の発展に貢献されました。

学術研究としては、海洋における炭素の研究で、海洋化学にたいして重要な貢献をされました。海水中の炭素は言うまでもなく現在温暖化で問題となっている地球上の炭素サイクルの重要な部分を占めるもので、現在の研究を先取りするものであります。海水中の全炭酸は、当時は今日ほど高精度な分析法はなかったため、独自でマイクロ拡散法を開発され海水中の全炭酸の分布を明らかにされました。さらに、海水中の全炭酸のイオン種の分布を計算で求め表を作成しました。当時は、猿橋のテーブルとして高く評価されていました。さらに、この分析法を1953年の米国による水爆実験で降下したビキニの灰に適用して、第五福竜丸で採取されたビキニの死の灰が珊瑚礁のかけらである炭酸カルシウムからなることを証明されました。また、海水中の人工放射性物質の研究にも大きな成果を残されています。特に、海水中の $^{137}\text{Cs}$ 濃度の広域分布結果は、貴重なデータで現在の海洋循環モデルの検証のためにも役に立っています。 $^{137}\text{Cs}$ はアルカリ金属に属し、海水中から選択的に効率良く濃縮する方法は簡単ではありませんでした。日本の研究者はAMPが効率良く海水中から $^{137}\text{Cs}$ を濃縮することを発見し、猿橋先生はこの方法を適用して、海水中の $^{137}\text{Cs}$ 濃度を求めました。当時、米国では別の方法が採用され日本のデータは当てにならないとの評価がありました。猿橋先生は、日本で作成したAMPを米国に持ち込み、当時米国の海洋放射能の中心的な研究者であったスクリップス海洋研究所のFolsam教授のもとで分析を行い、AMPが有効であることを示されました。海水の全炭酸や $^{137}\text{Cs}$ の研究は、猿橋先生の業績を受け継ぎ改善すると共に、現在の高度化した分析法を活用することによって、現在の地球化学研究部の先端的研究の一つとなっています。

これらの研究成果に対して、猿橋先生は、1964年運輸大臣表彰（大気および海洋における人工放射能の研究）、同年財放射線影響協会、研究奨励助成金（海水中の放射性核種の分析法）及び、1985年地球化学研究協会「三宅賞」（放射性及び親生元素の海洋化学的研究）を受賞されています。また、1981年に女性研究者に贈られる「エイボン女性大賞」を受賞されています。

猿橋先生について忘れてならないのが女性研究者を顕彰する「猿橋賞」です。猿橋先生は、日本の女性科学者の草分け的存在で「日本婦人科学者の会」の創立者の一人として、長年女性研究者の地位向上のため努力されてきました。関連して、「女性として科学者として」などの著書を多く残されています。1980年、女性科学者の顕彰の為に創立されたのが「猿橋賞」です。今までに、著名な女性物理学者、化学者、気象学者が「猿橋賞」を受賞されるとともに、女性が科学界に確固たる地位を築くために役立ってきました。残念ながら、地球化学の分野で受賞者がなく、猿橋先生の心残りではなかったかと推察します。

猿橋先生は地球化学者の三宅泰雄先生のもとで、研究を続けられました。その結果、100篇近い科学論文（気象研究所編「Geochemical Study of the Ocean and the Atmosphere」（1978）等に集録）に加え多くの著書を出版しています。このような大きな業績を残されたのは、三宅先生を生涯の共同研究者として、厳しい研鑽に励まれたからと推察されます。猿橋先生は、研究についても生活についても大変厳しい先生で、先生が現役時代、地球化学・海洋化学の分野の皆様には有名でした。学会やセミナー等で、先生の厳しい質問を受けその場で立ち往生した研究者・学生も多かったのではないのでしょうか。

今後も、猿橋先生の意味を受け継ぎ地球化学の発展のため努力したいと思います。猿橋先生、安らかにお眠り下さい。

（気象研究所地球化学研究部）